平成26年度第3回「墨田区子ども・子育て会議」・「学齢ワーキンググループ」議事要旨

日時：平成 26 年 6 月 9 日（月）午後 6 時 30 分～8 時 30 分
会場：墨田区役所 122 会議室

次　第

（※議事次第は、特になし）

配布資料

参考資料　「放課後子ども教室」事業について（教育委員会事務局生涯学習課）

出席者（敬称略）

○委員

野原　健治（興望館館長）
服部　榮（社会福祉法人　雲柱社理事長）
金子　里美（NTT 労働組合東京総支部執行委員）
野口　悦子（主任児童委員）
内田　淳（青少年委員協議会委員）
森　八一（青少年育成委員会連絡協議会副会長）
福田　三加代（公募）
須藤　太郎（八広小学校長）
菊本　和仁（桜堤中学校長）

＜欠席委員＞

小菅　崇行（小菅株式会社代表取締役会長）

＜傍聴＞

１名（男性１名）

○課長出席者

小倉 孝弘（子育て支援課長）、鈴木 一郎（子ども課長）

○事務局出席者

柿畑・澄田（子ども課）、石川（生涯学習課）、榊原（区民活動推進課　アドバイザー）、田村・酒井（子育て支援課）

○事務局（㈱地域総合計画研究所）

森井・佐々木

（1） はじめに

菊本委員	（自己紹介）
委員	第３回までの経緯を踏まえ、今日は須藤先生に高学年児童の放課後の過ごし方について話して頂き、学童クラブ、児童館の在り方について議論する。

(2)報告と議論

委員	（放課後児童の受け皿の必要性について、子どもの自立の必要性とニーズの捉え方、教育的観点、また父母の置かれている状況等からの問題を提起）
委員	（最近の中学生の実態と課題について、そして学童クラブや児童館がどう関わっていくかの問題を提起）
委員	手厚すぎる保護は高学年には必要ない。子どもが生活に向き合っていけるようなことが大切である。
委員	今の子どもたちは家の中にいても、携帯などで外との繋がりを持っていて、外からの見守りだけではわからない事が多い。
委員	子ども会は昔と異なってきた。理由は、役員の男性が少なく女性だけになり、中学生までを把握しづらくなってきたこと、町会も高齢化し若い人が少なくなってきたこと、さらに学校の自由選択制ということで他の地域から来ている子どもを誰が見るかといったこと、また、習い事に行っている子どもが多く町会のイベントに参加する子どもが少なくなっていること等である。そうした状況から、子どもの居場所について考える必要がある。
委員	パトロールをしていても区内で子どもたちを見ることが少ない。ラインなどを通じて繋がっており、大人の目の届かないところで何かが起きているのではないかと思われる。
委員	子どもたちは、スマホ等の機械の操作は上手くなってはいるが、思考力の点とやっていることは、昔と同じ子どものままである。昔と違うのは、一瞬にして拡散する媒体があることで、昔は笑い事で済んでいたことが大事になってしまう可能性がある。
委員	スポーツと習い事がセットになった学童クラブがあるとよい。
事務局	学童クラブの子どもたちは、2 年生の後半あたりから、「学童クラブは嫌いではないが、他の友達と遊べないからつまらない」と言う声を発しはじめる。管理されたクラブでの生活は社会性が育ちにくい面がある。低学年を対象にプログラムを組んできた学童クラブの中に、6 年生までを入れていくのは、子どもにとっても可哀そうなことでもある。4 年生を過ぎると、子ども自身が自主的に時間と空間を使うことができるようになることが大切で、そのための居場所をどう多様に作ってあげられるかが求められる。学童クラブだけで囲ってしまうのでなく、地域や児童館、その他の施設などがあって、その中で、子どもたちが居場所を選べられるような施策が望まれる。また、メールの使い方のルール等については、子ども同士で決めることは難しく、親の協力が必要である。
事務局	（放課後子ども教室事業の報告。趣旨、経緯、運営主体、事業内容、効果等について） 運営主体は PTA だけでなく、学校によっては町会や敬老会等が中心になっているケースもある。学校によって対象学年も違うが、平均して 60～120 名がその都度参加している。運営上の課題としては、見守り体制がなかなか確保できず、見守りをしてくれる人材を発掘することにある。また、放課後子ども教室事業は学校管理下の事業ではないため、保健室を

	必ず利用できるということではないが、協力はしてもらってはいる。
委員	見守る人にとっては、どの程度見守れば安全か、どこまで責任がとれるかは難しいところがある。ただ、大人が見守ればいいということだけでは済まない。見守る人は、研修などを受ける必要がある。
委員	児童館は地域との結びつきが不可欠である。学童クラブは児童館の中の一つの機能だったが、時代の流れの中で学童クラブが前面に出てきた。地域の中での子どもの多様な居場所として学童クラブを充実させる必要はあるが、児童館の役割も引き続き大きい。荒川区などでは放課後子ども教室事業に専門の職員をつけているケースもある。
委員	児童館の実態の実例として、児童館が朝 9 時から開くのを待っている外国人の子どもがいる。居場所のない外国人の子どももいて、児童館の存在は大きい。
委員	公園のトイレは不安で、子どもに児童館のトイレを利用するように言っていた。その後、高学年になった子どもは児童館を運営する側に立って関わったことによって、子どもが成長した。
委員	放課後子ども教室事業はプラットフォームとしては良い仕組みである。運営面でのリスクマネジメントにも団塊世代が地域にゆっくり関わっていける形で取り組んでいけば、一層良い仕組みになるのではないか。
委員	他市で、中学生がバンドなどもできて、人気のある児童館があると聞いたことがあるが、墨田区にも、バンドなどをできる児童館はあるか。
委員	中学生のバンドは、東向島や桜橋児童館で 26 年前からやっていた。昔、児童館のバンド等に関わっていたお母さんたちがまた少しずつ戻ってきて、児童館や地域に関わってくるようになっている例もある。
委員	学童クラブのあり方は、手厚い保護の必要性と自立の視点との関係で、施策をどう見立てていくかが問われる。
委員	家庭をフォローできる、あるいはソーシャルワーカー的な立場から関わっていける人が、児童館にも必要ではないか。
委員	かつて児童館は遊びに来た子どもを安全に遊ばせるところで、学童クラブは働いている親に代わって子どもを見守ることが仕事だった。最近は親の子育て力の低下や児童虐待等子どもをめぐる様々な問題に対して、児童館・学童クラブに来ている子どもを見るだけでなく、子育てしている家庭や親を支援することも求められている。
委員	親の学校への関心が大きくなっており、その周りに学童クラブへの関心がある。親も悩んでいて、親に何かをしてくださいとお願いしても耐えられなくなっている親もいて、子ども支援、家庭支援ということに関心が持たれるようになってきた。そうした中で、児童館でも手に負えない、親も困っている子を抱えた重いケースもあり、我々も、そうした子どもと親と家庭との橋渡し的な役割を果たすことが求められている。
事務局	大きな課題として、一つは、小学 1 年生が児童館・学童クラブで安心して過ごせるように出来ること、二つ目は学童クラブと放課後子ども教室との連携、行政の福祉と教育の垣根をどう取り除くか、三つ目は中高生の中での要保護の子どもの居場所の問題があげられる。
委員	学校教育の流れとしては、40 人学級から 35 人学級へと移行しつつあり、余裕教室が不足してきている。学校の中で小学 1 年の壁を取り除く課題としては、人と場所の問題がある。
事務局	学童クラブは増やしたいが、地域性があり、充足しているところと不足しているところの

	調整をどうするかがある。また、例えば児童館のランドセル預かり事業のような制度で解消していくといった方法も含めて検討していく必要がある。
事務局	学童クラブの対象は、原則３年生までで、障害を持っている場合など例外的処置として６年生まで受け入れるとしている。確かに、６年生まで受け入れて欲しいというニーズもあるが、地区によって異なる。小学校の空き教室など、利用できるものは利用する、施設の拡充が図られるものは拡充するといった多角的に対応することを考えている。
委員	実際は、狭い施設だと子どもは来なくなり学童クラブをやめていく。狭いところは難しい。４年生以降については、小学校２校に一つ児童館があるので、施設的にも児童館で受け入れられるのではないかと思っている。
事務局	児童福祉法の改正で小学６年生までが対象になった。法の解釈にもよるが、小学６年生までは事業の対象ではあるが義務化したものではない。今後、条例でどう明記していくか難しい問題である。

(3)議論のまとめと今後について

委員	今日は、放課後児童の在り方の議論を通じて、小学高学年、中学生、高校生まで視野に入れた話し合いを行った。今の事業の取り組み等の話を受け、１年生から３年生までは特別な配慮が必要、４年生から６年生までは発達に応じて多様なあり方があり、その多様性をきちんとした見方で受けとめ、地域や学校と連携ができる児童館の在り方が求められる、という話し合いだった。今後は仕組みなどを具体的に検討したい。 次回は、既に要保護の話が出ているので、子育て支援総合センターでの７年近い実績などの話を受けて、要保護の実態をつかむということで話し合いを持ちたい。守秘義務もあるので具体例としてではなく、ケースを加工して提示していただき、特にどのような連携が図られたかを強調して話して頂き、要保護家庭をどう考えていくか、関わっていくかの議論を行いたい。

(4)次回の予定

委員	次回は、委員に日程のアンケートを行って調整し、７月中の一番多く集まれる日に行いたい。

以上